みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「上の人々」と「下の人々」：オラン・アスリ社会における開発と階層化

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信田, 敏宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5522

「上の人々」と「下の人々」

——オラン・アスリ社会における開発と階層化——

信田 敏宏

一 はじめに

英国植民地期にペラ博物館長として活躍し、日本占領期に不慮の死を遂げた人類学者ヌーンは、その論考において、トゥミア（*Temiar*：マレー半島の先住民オラン・アスリ（*Orang Asli*）の下位民族集団の一つ）はマレー化（イスラーム化）しない限り、生存の道はないとして、マレー化を半ば容認する主張を行っていた［Noone 1936：57］。その背景には、ジャングルを出て、マレー人の多く住む下流の村落で生活しはじめたトゥミアの人々の一部が、イスラームに改宗し、「マレー人」となったものの、周囲のマレー人社会に溶け込むことができず、親族の住むジャングルに再び戻っていく状況が存在していた［Noone 1936：56-57］。ヌーンはそうした状況を憂慮して、右記の主張を行ったのである。また、トゥミアをはじめとするオラン・アスリの文化の保護を主張していたヌーンは、オラン・アスリの文化を破壊するとして、オラン・アスリに対するキリスト教の宣教活動を批判していた［Noone 1936：58］。キリスト教に改宗してマレー人社会との摩擦が生じるよりも、周囲のマレー人との融和をはかるためにイスラームに改宗することを、オラン・アスリの生存戦略として主張したのである。

こうしたマレー化（イスラーム化）論は、マレーシア独立以降のいわゆる「オラン・アスリ政策」に部分的にではあるが反映されていった。一九六一年のオラン・アスリ政策の指針のなかでは、オラン・アスリのマレー社会への統合が提唱されており［Government of Malaysia 1961］、一九七〇年代以降のブミプトラ政策下では、オラン・アスリの経済開発政策は、オラン・アスリ社会の経済レベルを引き上げ、最終的にはマレー社会へ統合させることを意図したものであった［Carey 1968；

MOHD. RUSLAN 1974]。また、同時期には、オラン・アスリのイスラーム化論が試みられており［BAHARON 1968：CAREY 1970］、一九八三年にはオラン・アスリ局が公式にオラン・アスリに対するイスラーム化政策を表明した［JHEOA 1983］。一九八〇年代以降のイスラーム化政策では、イスラーム化を目的とした経済開発政策が表明されている。（イスラーム化を含意する）緩やかなマレー化から（イスラーム化を全面に押し出す）性急なイスラーム化まで、統合政策と同化政策という振り子の中に、今日のオラン・アスリ政策は存在していると言ってもよい［cf. 信田　一九九九］。

調査地ドリアン・タワー村（*Kampung Durian Tawar*：仮名）（図一参照）は、一九七〇年代以降、右記の意図の下、経済開発計画が他のオラン・アスリの村に先駆けて実施され、いわば政府による開発のモデル村の役割を果たすことになった村である。一九七〇年代初頭に、当時のオラン・アスリ局長官であったバハロン［BAHARON 1973］が、ドリアン・タワー村において人類学的調査を実施したことも、経済開発の対象となった所以でもある。経済開発は、将来的なマレー化（すなわちイスラーム化）を意図して実施されたものであった。

オラン・アスリ局をはじめとする政府当局には、経済開発によって経済レベルを引き上げたドリアン・タワー村の人々をイスラームへ改宗させることで、「オラン・アスリのイスラーム化」の模範とする意図が存在していた。しかし、ドリアン・タワー村では、当初は開発計画を拒絶し、後には開発計画から排除されていった経済的な貧困層（後述する「下の人々」）を中心として、イスラームに「名目的」に改宗する人々が増える事態となっている。逆に、本来のイスラーム改宗の対象であるはずの人々（後述する「上の人々」）は、名目的なイスラーム改宗者たちへの反発から、イスラーム化政策そのものに対しても抵抗の姿勢を示すようになっている。つまり、政府の意図する経済開発の延長線上にある「イスラームへの改宗」、あるいはマレー社会への統合・同化が、ドリアン・タワー村の場合には、政府の意図とは逆の現象として表出しているのである。

本稿で開発現象を考察するに際して、筆者は、開発が経済状況ばかりでなく人々の意識やアイデンティティをも変えてしまう点に注目する。なぜなら、開発を拒否した人々が開発と結びついているイスラーム化を選択し、開発を受け入れた人々がイスラーム化を拒否しているというドリアン・タワー村の現実が存在するからである［信田　一九九九］。開発計画という制度の下では、開発を拒絶している人々が結果的に開発がもたらす価値基準を受け入れてしまう場合もあれば、それまで貧しさを知らなかった人々が自分たちの貧しさを知ってしまう場合もある。逆に、開発を受け入れたはずの人々が、開発をもたらした国家に抵抗することになる場合もあれば、開発によって獲得した地位を維持しその真正性を強調するために、（開発の言説に反する）「伝統」（例えば、アダット）を政治的に流用する場合もある。このような開発にまつわる村レベルの様々な現象を「開発の人類学」［足立　一九九五：一二九―一三三］として記

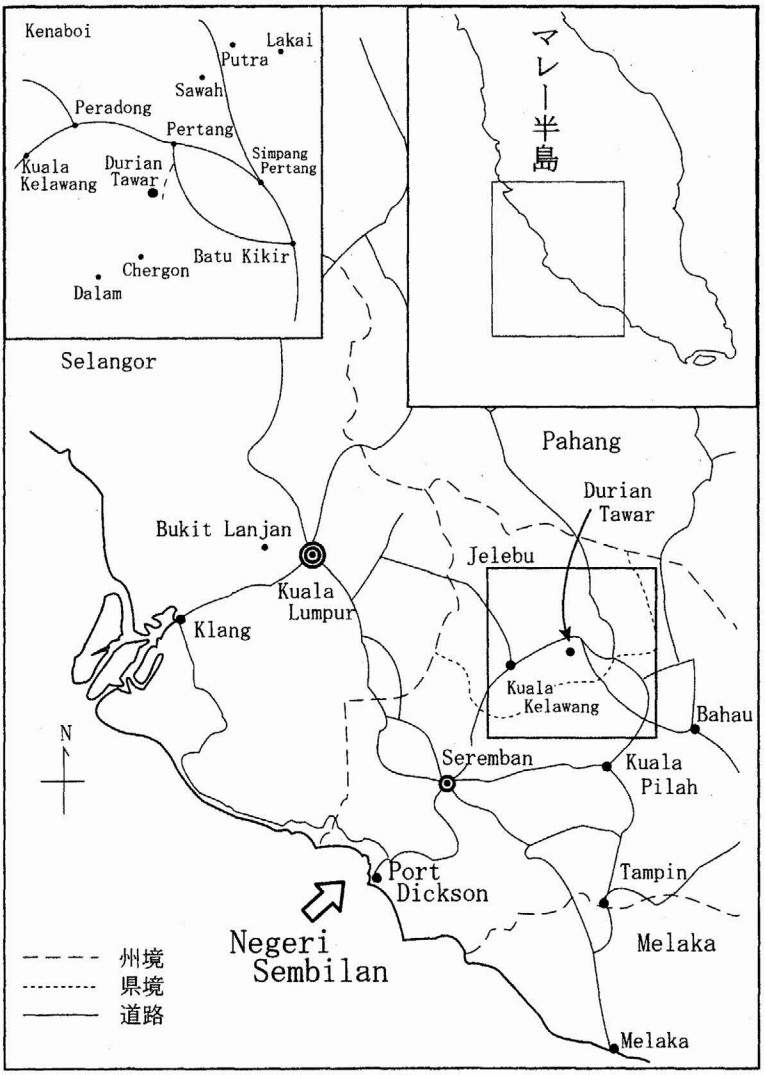

Kenaboi
Lakai
Putra
Sawah
Peradong
Pertang
Simpang Pertang
Kuala Kelawang
Durian Tawar
Batu Kikir
Chergon
Dalam
マレー半島
Selangor
Pahang
Durian Tawar
Bukit Lanjan
Jelebu
Kuala Lumpur
Klang
Kuala Kelawang
Bahau
N
Seremban
Kuala Pilah
Port Dickson
Tampin
Negeri Sembilan
Melaka
Melaka
州境
県境
道路

図1　調査地

述・考察することが、筆者のさしあたっての課題である。

そうした課題を念頭に置きながら、本稿では、開発計画によって生じたドリアン・タワー村の階層化（階層意識の生成）の問題を扱う。ドリアン・タワー村はトゥムアン（*Temuan*）と範疇化される人々の村であるが、トゥムアン社会は、平等社会が強調されるオラン・アスリ社会において、位階的な社会構造を持つ社会として注目されている［HOOD 1989］。こうしたオラン・アスリ社会の社会組織論において、トゥムアン社会の代表例としてドリアン・タワー村はしばしば取り上げられている。バハロン［BAHARON 1973］が一九七〇年代初頭にドリアン・タワー村で人類学的調査を実施した当時は、バティン（*Batin*）などのアダット・リーダー（*lembaga adat*）を上層とする階層は存在していたものの、村人の間の経済的格差はあまり見られなかった。それが、筆者が調査を実施した時点（一九九六年―一九九八年）では、開発計画によって村人の経済的格差が広がっており、村人は「上の人々」と「下の人々」という範疇で分類され、そこにドリアン・タワー村における（開発による）階層化の過程を見ることが可能となっていた。

本稿では、ドリアン・タワー村の歴史を紐解きながら、開発計画の結果として生じた村人の範疇化を記述・考察する。本稿で対象とするのは、開発計画が進行するにつれて精鋭化した「上の人々」と「下の人々」というドリアン・タワー村の村人の範疇の生成過程である。村人が使用する「上」と「下」という言葉には、単なる地理的な位置ばかりでなく、村社会のなかの「上層」と「下層」という階層意識が含意されている。そこで、本稿では、「上の人々」と「下の人々」という範疇の生成の歴史をたどり、今日の「上の人々」と「下の人々」の経済状況を比較し、開発計画の結果として生じた階層化がどのような意味を持つのかを考察する。

二　ドリアン・タワー村における移住史と称号継承の政治学

1　移住小史

今日のドリアン・タワー村は、森の生活を中心とした「伝統的」なオラン・アスリの集落のイメージとは異なる。集落の歴史から、彼らが避難のために移動を繰り返してきたことが分かる。実際に、その移動過程の中で今日の親族関係は形成されている。ここでは、そうしたドリアン・タワー村の歴史を、バハロンの記述［BAHARON 1973：56-64］を参照しながら、簡単に振り返ってみる。

ドリアン・タワー村の人々の祖先バティン・バニン（*Batin Baning*）とその親族たちがヌグリ・スンビラン州（*Negeri Sembilan*）のタンピン（*Tampin*）方面からドリアン・タワー村の南側に移住してきたのは、バハロンが調査を行った時から一世紀以上前の一八七〇年代頃のことであったという（移住①）（本節のドゥスンおよび居住地の位置については図二を参照）。彼らが最初に落ち着いたドゥスン・イラム（*Dusun Ilam*）において、陸稲・タピオカ・トウモロコシなどの焼畑

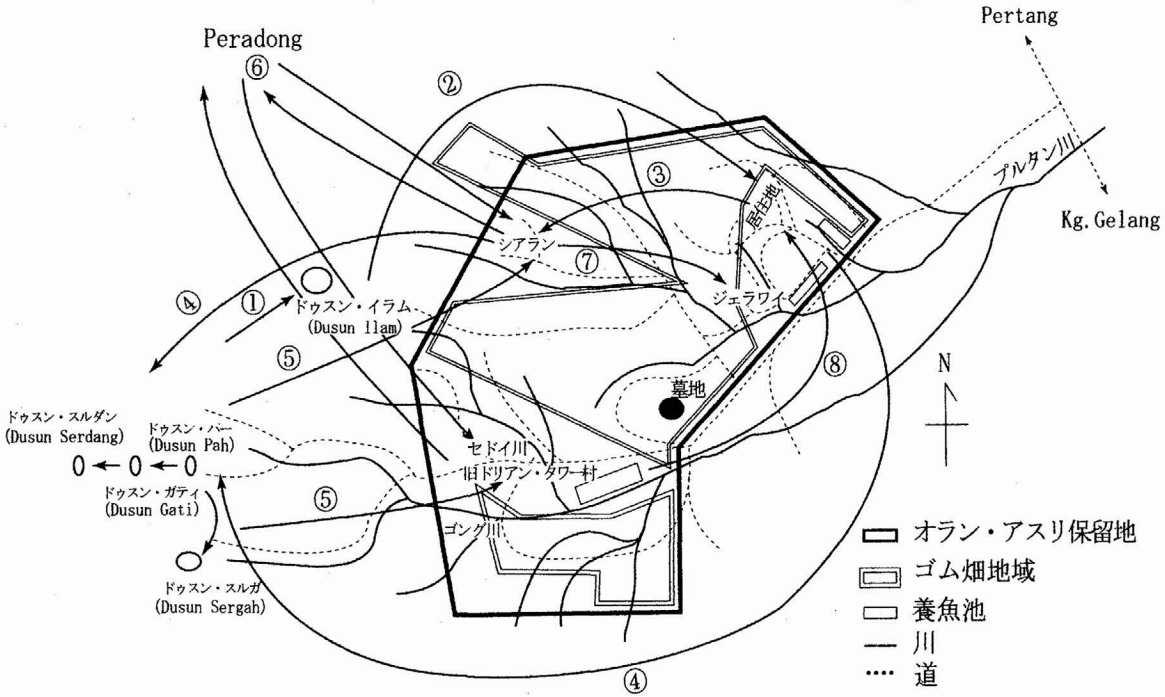

Peradong
Pertang
Kg. Gelang
プルタン川
居住地
シアラン
ジェラワイ
ドゥスン・イラム
(Dusun Ilam)
墓地
N
ドゥスン・スルダン
(Dusun Serdang)
ドゥスン・パー
(Dusun Pah)
ドゥスン・ガティ
(Dusun Gati)
ドゥスン・スルガ
(Dusun Sergah)
セドイ川
旧ドリアン・タワー村
ゴング川
オラン・アスリ保留地
ゴム畑地域
養魚池
川
道

図2　ドリアン・タワー村

耕作を行い、ドリアンの木を植えたという。

バティン・バニンとその妻がウル・ブラナン（*Ulu Beramang*：今日のヌグリ・スンビラン州とスランゴール州の境界付近）にドリアン収穫に出かけ、マレー虎に遭遇して殺されてしまうと、バティン・バニンの「母方イトコ」であったピンダ（*Pindah*）の「マレー人」夫バティン・シウントゥン（*Batin Siuntung*）[1]がバティンの称号を引き継いだ。そして、一八八〇年代ころにバティン・シウントゥンに率いられた人々は、ドゥスン・イラム付近から現在のドリアン・タワー村の居住地付近に移住した（移住②）。そして、そこで水田耕作をはじめたという。ドリアン収穫期には、近隣のマレー人親族を招いて、ドリアンやその他の果物を共食したという。こうしたドリアン収穫期にマレー人を招く習慣は日本軍のマレー半島侵攻まで続いた。

バティン・シウントゥンの娘の夫ボンス（*Bongsu*）が、一九二〇年頃に次のバティンの称号を継承して、バティン・シウントゥンの息子アリ（*Ali*）はジェクラの称号を名乗った。当時のジェルブ（*Jelebu*）のウンダン *Dato' Syed Ali*（18？？-1905）、*Dato' Abdullah*（1905-1945）[2]は彼らをワリス・ディ・ダラム（*Waris Didalam*：奥地の親族）と呼び、近しい関係にあったと伝えられている。

バティン・ボンスの時代（一九二〇年―一九四〇年）に、近隣のラカイ（*Lakai*）村のバティン・ドゥラン（*Batin Dulang*）や今日のダラム（Dalam）村付近のチェルゴン（*Chergon*）のバティン・ケセット（*Batin Keset*：バティン・ボンスの実兄）はドリアン収穫期に招かれてドリアン・タワー村を訪れていた。そのため、ドリアン・タワー村の人々はラカイやチェルゴンの人々と通婚関係を持つようになっていったという。一方、ジェクラ・アリに率いられた人々は、バティン・ボンスに率いられた人々と離れて、現在のシアラン（*Sialang*）付近に移住した（移住③）。ジェクラ・アリの息子ドゥラマン（*Deraman*）が次のバティンの称号を継承してシアランに留まったので、バティン・ボンスの息子レワット（*Lewat*）がムントゥリの称号を継承して旧バティン・ボンス派のリーダーとなった。ここに、ジェクラ・アリ派とムントゥリ・レワット派が形成された（以下、アリ派とレワット派と表記する）。

日本軍占領期に、バティン・ボンスの娘の夫パンリマ・セン（*Panglima Seng*：華人）は日本軍に捕まり殺されたが、彼をかくまったとして日本軍の怒りをかった（と判断した）ドリアン・タワー村の人々は、森の奥へ避難した（移住④）。今日のドゥスン・パー（*Dusun Pah*）やドゥスン・ガティ（*Dusun Gati*）において、これもまた華人をかくまったとして日本軍の襲撃を恐れて逃げてきたダラム村やチェルゴンの人々と合流したのである。日本占領期の混乱が落ち着くと、ドゥスン・スルガ（*Dusun Sergah*）付近にまで森から出てきたという。

日本軍が降伏して、英連邦軍からそのことを教えられた人々は、森から出てくるようになった。アリ派はシアランに戻り、

レワット派は（日本軍占領期以前とは異なる）旧ドリアン・タワー村付近に住むようになった（移住⑤）。その後、非常事態宣言期に入ると彼らは、英連邦軍の軍事政策によって、プラドン（*Peradong*）付近の再居住地で避難生活を行うようになる（移住⑥）[3]。そこに集まった人々は、このドリアン・タワー村やラカイの人々ばかりでなく、クナボイ（*Kenaboi*）やクアラ・クラワン（*Kuala Kelawang*）方面のオラン・アスリの人々であった。その人数は四〇〇名ほどであったという。

プラドンにおいて、それまでの生存経済の他に、ゴムを植えたり、マレー人のゴムを採取する賃金労働を行ったりと、ゴム採取による現金収入の仕事がトゥムアン経済に導入された。一九五六年までには、ほとんどの人々はそれぞれの出身地に戻ることを許された。アリ派はシアランに、レワット派は旧ドリアン・タワー村付近にそれぞれ戻ってきたのである。アリ派はその後分裂して、一部の人々は現在のジェラワイ（*Jelawai*）付近に移住した（移住⑦）。

一九六六年にバティン・ドゥラマンが亡くなってから一年後、現在のバティン・ジャングットがバティンの称号を継承することになった。一九六七年三月二七日のことである。当時、バティン・ジャングットはオラン・アスリ局職員であり、二人の妻たちはダラム村に住んでおり、ダラム村をその本拠地としていた[4]。しかし、バティンの称号を継承した後、妻の一人とその子供たちを旧ドリアン・タワー村に住まわせ、自らはオラン・アスリ局職員として同じプルタン地区にあるプトラ（*Putra*）村のオラン・アスリ局出張所に勤務して、バティンとしての職務を遂行する際にはドリアン・タワー村を訪れた。そして、一九七〇年の家屋建設プロジェクトによって、旧ドリアン・タワー村に住んでいたレワット派の人々は現在の居住地に移住したのである（移住⑧）。

ドリアン・タワー村の移住の歴史を振り返ってみると、バティン・バニンらがタンピン方面からドゥスン・イラムにやって来たといっても、彼らが本来はどこから来たのか、そして何者なのかということが不明のまま、村の歴史が始まっていることに、まず気づくだろう。その後、パハン（*Pahang*）での戦争が原因で逃走してきたとされる「マレー人」シウントゥン（マレー人名は不明）のリーダーシップの下で、当時のマレー首長ウンダン（*Undang*）の傘下に入り、マレー人との交流がはじまる。英国植民地期末期には、いわゆる「華人」の存在も見え隠れしている。

こうした民族混在状況が、ドリアン・タワー村の初期の歴史を彩っている。しかしながら、彼らがいわゆる「マレー人」とは異なる存在であったことは、一九一〇年代にこの地域を訪問したエヴァンスの調査報告［EVANS 1915］から窺える。エヴァンスは、近隣のジャクンからの情報によって、ドリアン・タワー村の「ジャクン *Jakun*」は警戒心が強く、森の生活を好み、マレー語を解せず、バティン（シウントゥン?）も信頼できる人物ではないとして、ドリアン・タワー村への訪問を行わ

なかったと報告している［EVANS 1915：105］。ドリアン・タワー村の人々が、イスラームを信奉するマレー人とは異なる人々として、「サカイ」や「ジャクン」と呼ばれる人々であったことはこのことから確かであるが、今日のドリアン・タワー村の口承史からは、「マレー人」や「華人」と通婚関係をもつ人々がいたり、当時のマレー政体と親密な関係を持っていたことが分かっているのである。しかし、実態はどうであれ、彼らが「サカイ」、「ジャクン」と認識されたことは彼らのその後の運命を決定づけていく。

日本軍の侵攻は、そうした彼らにとって突発的な出来事であったが、結果的に彼らの社会に重大な影響をもたらすことになった。森の奥深くに避難したことによって、マレー人社会から切り離されたのである。日本軍占領以前のマレー人との関係（ドリアン収穫期の訪問など）は、その後復活することはなかった。また、「非常事態宣言期」に、彼らの生活の場であった森が華人中心の共産ゲリラと英連邦軍との戦場と化したことは、今日のオラン・アスリ社会の状況を決定づけることになった。彼らは、日本軍占領期とは異なり、共産ゲリラの協力者という疑いを持たれ、森から引き出され、「再居住地」での定住生活を行うようになったのである。そうしたオラン・アスリに対し、当時の政府は軍事的にも行政的にも、何らかの処置を施す必要に迫られたのであった。今日のオラン・アスリは、ここに誕生することになったと言ってもいい。この時期に、オラン・アスリ局（当時は原住民局）の設置（一九五〇年）とその規模拡大（一九五四年）、オラン・アスリ法の制定（一九五四年）など、今日のオラン・アスリ行政の基礎がつくられている。

非常事態宣言期が終息し、ドリアン・タワー村に戻ってきた人々は、もはや以前の彼らとは異なる人々になっていた。多くの儀礼や呪術に関する知識は失われ、森で生活するための知識そのものも大半は失われていたのである。避難民としての生活は、彼らの生業すら変えたのであった。独立後、政治の主導権を握ったマレー人との関係も一変することになる。オラン・アスリと範疇化された彼らは、開発が必要な貧しい民として、そして将来的にはマレー人社会に統合されるべき存在として位置づけられるようになったのである。

バティン・ジャングットが、バティンの称号を継承した一九六〇年代は、まさにオラン・アスリとマレーシア国家との新たな関係が確立しつつある時代であった。

2　バティン・ジャングット

バティン・ジャングットと彼の兄ジェナン・ミサイが、一九七〇年代以降のドリアン・タワー村を率いていく存在となるのだが、彼らの父親は前述の日本軍に殺された「華人」であった。日本軍占領期には、母親の親族に従い、森の中で生活するようになったという。それ以前は、父親が大工をしていたマレー村落で過ごしていた。

父親の兄弟もまた、オラン・アスリ女性と「結婚」してお

り、バティン・ジャングットの「イトコ」たちは非常事態宣言期に共産ゲリラとして英連邦軍と闘い、戦死したという。バティン・ジャングットとのインタビューでは、当時、共産ゲリラへの協力を疑われた彼は、非常事態宣言期に英連邦軍に捕まり、三ヶ月ほど刑務所に投獄されたという。出獄後は、英連邦軍のガイドとして、森の道の案内や荷物運搬人として働くようになり、オラン・アスリ局の前身「原住民局」が設置されると、職員として雇われたという。

ヌグリ・スンビラン州のオラン・アスリの村々の「開発」の先遣隊として、バティン・ジャングットはオラン・アスリ局職員として働くようになった。オラン・アスリ局は、バティン・ジャングットを通じて、オラン・アスリ社会の状況を知るようになり、バティン・ジャングットが現場での具体的な開発の指揮をとっていた。学校建設、家屋建設、会館（*Balai Raya*）建設、ゴム畑などの耕作地の開拓作業などの「開発」は、バティン・ジャングットという仲介役を通して実施されたのである。

オラン・アスリ局職員という立場ではあるが、リーダーとしての資質が人々に認められていた彼が、一九六七年にバティンの称号を継承したことは、名実ともに、政府（オラン・アスリ局）とオラン・アスリの村の仲介役になったことを意味していた。それ以前のバティンには、称号保有者としての権威を保持し、外部世界（マレー政体や植民地政府）との交渉役という役割が確かに存在していたのだが、オラン・アスリ局という行政当局につながる権威はそもそも存在していなかった。しかし、バティン・ジャングットがバティンの称号を継承する頃には、バティンの称号はウンダンや英国植民地政府ではなく、マレーシア連邦政府内のオラン・アスリ局によって承認されることになっていたのである。バティン・ジャングットがバティンの称号を継承したこと自体に、オラン・アスリ局の影響力が見え隠れしている。

一九七〇年代以降のドリアン・タワー村の開発は、オラン・アスリ局長官でもあったバハロンとバティン・ジャングットの関係、すなわち、オラン・アスリ局とバティン・ジャングットの関係を抜きにしては語れない。バハロンの調査が可能になったのも、バティン・ジャングットの助力があったからだという。ドリアン・タワー村が、開発のモデル村とされるのも、仲介役としてのバティン・ジャングットの存在に因るところが大きい。

3　称号継承の政治学

称号保有者は、紛争処理を行う権利を保持し、様々な儀礼の執行者であり、特に、バティンは祖先からの血筋（*keturunan*）やエルモー（*ilmu*：邪術を含む呪術の知識）の継承者として人々に認められている。坪内［一九八四］は、ヌグリ・スンビランにおいて、称号の付与という行為によって、伝統的な王国の政治体系が維持されてきたと論じているが、バティンもまた、マレーの伝統的首長ウンダンに連なる権威体系として存在していたのである。

バティンの称号の継承は、ドリアン・タワー村においては、母系原理に基づいて行うのが規範とされてきた。シウントゥンやボンスは、正統な継承者が成長するまでの一時的なバティン保有者と見なされていた。ドゥラマンも然りである。初代バティン・バニンと同一の母系出自集団に属する者たちが、正統なる継承者と見なされているのである。しかし、ドリアン・タワー村の称号継承過程を振り返ると、必ずしも母系の原理で称号が継承されているわけではなく、時々の政治状況の中で、いわば称号継承が「操作」されている様子が窺える。

バティンの称号の継承は、バティン・バニンからバティン・ジャングットまで既述したが、バハロンの記述［BAHARON 1973：115-127］を参照しながら、その他の称号継承の歴史を振り返ってみる（図三参照）。その他の称号は、基本的に、バティンが付与する称号である。したがって、称号継承過程の歴史は、バティンのリーダーシップ、すなわち、村内政治の歴史でもある。

①［バティン・バニン］

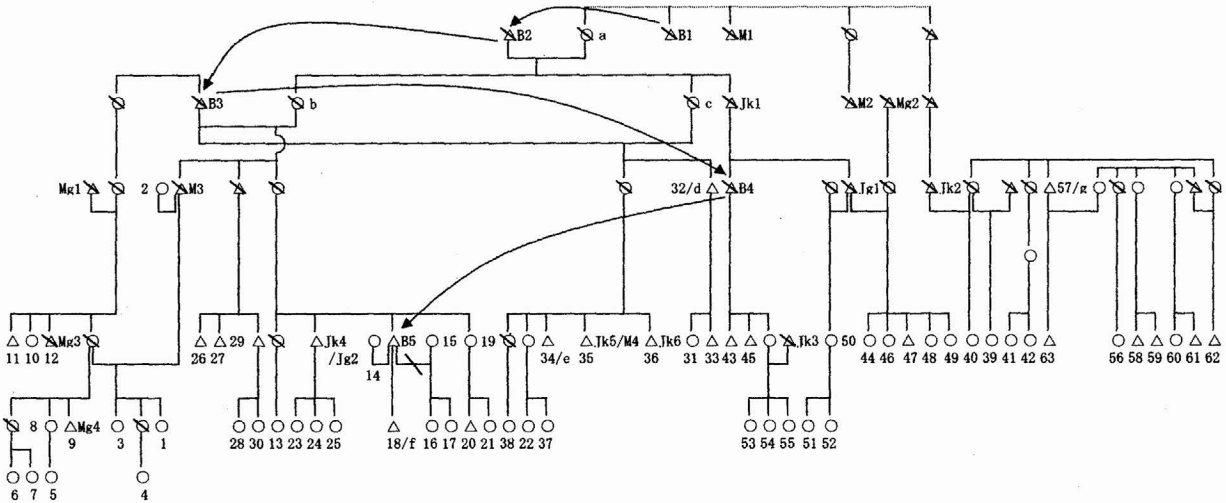
バティン・バニン（B1）の時代には、他の称号保有者は、ムントゥリの称号を保有していたパンク（*Pangku*）（M1）だけであった。パンクはバティン・バニンの「母方イトコ」であるという。

②［バティン・シウントゥン］

バティン・バニンがマレー虎に殺されて亡くなった時、バティンの称号の継承候補者はアリ（Jk1）とパンジャン（*Panjang*）（M2）であったが、彼らは若すぎたと言われる。したがって、マレー人でもあり、本来ならばバティンの称号を継承する親族的位置にいなかったシウントゥン（B2）がバティンの称号を継承することになったという。その後、アリはジェクラの称号を保有することになり、パンジャンはムントゥリの称号を継承することになる。シウントゥンがバティンの称号を継承することになったのは、彼の個人的能力とマレー首長ウンダンからの承認が影響していたと言われる。

③［バティン・ボンス］

バティン・ボンス（B3）がバティンの称号を継承する際にも、バティンとしての個人的能力とマレー人からの承認が要因として存在していた。アリやパンジャンがバティン継承候補者として浮上し、年齢的にも妥当であったが、彼らのリーダーとしての資質を周囲の人々は認めていなかったという。アリ自身も父親シウントゥンからバティンの称号を継承することは「トラー（*tuiah*）」（年長者に対する無礼をはたらくと災いを被るという信仰[5]）であるとバハロンには釈明していた。バティン・ボンスはバティン・シウントゥンの娘の夫（ムナントゥ：*menantu*）であり、本来のバティン継承者ではなかったが、人々から請われてバティンの称号を継承することになったとい



Batin	Mangku	Menteri	Jenang	Jekerah	a: Pindah
B1: Baning	Mg1: Sabat	M1: Pangku	Jg1: Kichoi	Jk1: Ali	b: Tepong
B2: Siuntung	Mg2: Hamat	M2: Panjang	Jg2: Misai	Jk2: Puyang	c: Siti
B3: Bongsu	Mg3: Ujang	M3: Lewat		Jk3: Sakit	d: Badak
B4: Deraman	Mg4: Hasim	M4: Gumuk		Jk4: Misai	e: Bangkong
B5: Janggut				Jk5: Gumuk	f: Tikak
				Jk6: Asang	g: Aki Main

注1)Batinは最高位のアダット・リーダー、MangkuはBatin不在時の代理、MenteriはBatinの補佐、Jenangはアダットの執行・保護、Jekarahは村人全体の保護といった役割をそれぞれ担うとされる。
注2)番号は世帯番号。村では妻方居住を原則としているが、例外もある。系図では基本的に婚入者（夫あるいは妻）を省略して、世帯間の親族関係を示すことにした。

図3　称号継承系譜図

う。

このころ、マンクゥ（*Mangku*）の称号が導入された。サバット（*Sabat*）（Mg1）は彼の娘ムライがバティン・ボンスの息子レワット（*Lewat*）と結婚したため、クナボイ（*Kenaboi*）からドリアン・タワー村に住むようになり、クナボイ時代のマンクゥの称号をそのまま名乗っていたのである。サバットがクナボイに戻りそこで亡くなると、マンクゥの称号はハマット（*Hamat*）（Mg2）に継承された。ハマットはマレー人であったが、彼の娘ルバール（*Lebar*）がアリの息子キチョイ（*Kichoi*）と結婚していたため、ドリアン・タワー村に住むようになっていた。ハマットは数年ドリアン・タワー村に住んでいたが、出身村に戻りそこで亡くなったという。このように、当初、マンクゥの称号は、バティン・ボンスやジェクラ・アリが、それぞれの姻族に対して敬意を示すために用いられていたのである。

④［バティン・ドゥラマン］

バティン・ボンスが亡くなると、バティン継承候補者として彼の息子たちが浮上した。バティン・バニンと同じ母系出自集団（プルット *perut*）が称号の正統な継承者と考えられていたからである。それに対して、ジェクラ・アリは父親からバティンの称号を継承することは「トラー（*tulah*）」になるとして、反発したと言われる。当時すでに年長者としてアリの発言権は強かった。アリの影響力の下、バティンの称号はアリの息子ドゥラマン（*Deraman*）（B4）に継承されることになった。そして、アリの息子キチョイがジェナン（*Jenang*）（Jg1）の称号を保有することになった。バティン継承候補者の一人であったレワット（*Lewat*）（M3）はムントゥリの称号を継承することになる。アリが息子ドゥラマンをバティンにさせたことは、レワット派の人々から「アダットに対する違反（*melanggar Adat*）」と見なされた。アリは自らのジェクラの称号を彼の母の「母方イトコ」の息子の息子にあたるポヤン（*Poyang*）（Jk2）に継承させている。

こうして、ドリアン・タワー村の称号はムントゥリ・レワットを除けば、アリ派が独占するという状態になった。すでに、アリ派の人々はシアランに移住していたので、事実上、ドリアン・タワー村の人々はレワット派とアリ派に分裂したのである。その後、バティン・ドゥラマンとジェクラ・ポヤンの間に紛争が発生し、ジェクラ・ポヤンは追放（*halau*）された。

⑤［バティン・ジャングット］

バティン・ドゥラマンが亡くなると、バティン候補者として、ミサイ、ジャングット、バダッ（*Badak*）、バンコン（*Bangkong*）の名が浮上した。バティン候補者の選択に最も影響力を持っていたのは、アリであった。バダッとバンコンは年齢や能力不足から候補者から外され、ミサイとジャングットに絞られた。当初、ミサイのところに使者が向けられたが、ミサイは「自分はアダットをよく知らないし、妻の村ドゥスン・

クブール（*Dusun Kubur*）を離れるわけにはいかない」として断ったという。その後、ジャングットの元に使者が向かい、ジャングットはバティンの称号の継承を了承したのである。称号は母系の原理で継承されるので、ミサイとジャングットの兄弟の父親が華人であることは称号の継承に支障をきたすことはなかったが、アリ自身はジャングットの言動に不満を持っていたという。ミサイとジャングットは、オラン・アスリ局職員（ミサイもまたオラン・アスリ局の仕事をしていたことがある）であり、弁才があり、リーダーとしての資質を認められていたのである。

バティンの称号の継承と同時に、不在になっていたマンクゥの称号がウジャン（*Ujang*）（Mg 3）に継承されている。ダラム村付近のチェルゴン出身の彼のキョウダイの親族集団もドリアン・タワー村で一群をなしており、そのリーダーとしてウジャンが選ばれたのである。ウジャンの姉はムントゥリ・レワットの妻ムライである。また、追放されたポヤンが保有していたジェクラの称号の継承も行われた。ジェクラの称号は、ドゥラマンの娘エンタック（*Entak*）の夫サキット（*Sakit*）（Jk 3）（バハン出身）に継承されることになった。

こうしてバティン・ドゥラマンの死後、レワット派はバティン・ムントゥリ・マンクゥの三つの称号を保有することになり、アリ派はジェナン・ジェクラの二つの称号を保有することになったのである。

アリの死後、バティン・ジャングットは、ジェクラ・サキットをその能力を持たないとしてジェクラの称号を剝奪した。ジェクラ・サキットはジェクラとしての任務を行わず、人々から信頼を失っていたという。次のジェクラ候補者として、バダットとバンコン（スィティ *Siti* を母祖とする下位母系出自集団の成員）が優先されたが、彼らはそれぞれジェクラの称号継承を「アダットを知らない」、「若すぎる」などの理由で断ったという。アダットに従えば、下位母系出自集団どうしが順番に称号を保有することが理想的とされ、スィティの母系出自集団の成員であるバダットやバンコンが優先されたのである。結局、（ムントゥリ・レワットやバティン・ジャングットも所属する）トゥポン（*Tepong*）を母祖とする下位母系出自集団の成員であるミサイが候補者として浮上して、ミサイ（Jk 4）がジェクラの称号を継承することになった。

その後、ジェナンの称号はキチョイが亡くなった後、ミサイ（Jg 2）に継承され、ジェクラの称号はスィティを母祖とする下位母系出自集団の成員であるグムゥ（*Gemuk*）（Jk 5）（バンコンの弟）に継承された。マンクゥの称号は、ウジャンが亡くなった後、ムントゥリ・レワットの義理の息子（ムライと先夫の間の子供）であるハシム（*Hasim*）（Mg 4）に継承された。ウジャンとハシムは同一の母系出自集団に属し、マンクゥの称号はこの母系出自集団内で継承されていくことがその際に了承されたという。また、その他の称号もピンダを母祖とする母系出自集団内（二つの下位母系出自集団が交互に）で継承されていくことが了承されている。こうして、アリ派には称号保

有者はいなくなっていったのである。

一九九七年三月三一日、ムントゥリ・レワットが前年一九九六年一一月に亡くなったために、ムントゥリの称号はグムゥ（M4）に継承され、ジェクラの称号はグムゥの弟アサン（Jk6）に継承されることになった。

バティン・ジャングットがバティンの称号を継承して以降、称号はレワット派（今日のバティン・ジャングット派）に集められていった。次章で述べるが、このレワット派の人々が家屋建設プロジェクトによって丘の上に移住し、「上の人々」と呼ばれるようになる。バティン・ジャングットは、オラン・アスリ局という後楯を得て、母系のアダットのイデオロギーを利用しつつ、称号の保有者をバティン・バニンの母系出自集団（レワット派の中核）に戻していったのである。それは、まさに彼が正統なバティン継承者であることを主張することでもあった。

こうして、称号保有者を近親の者たちに集中していったバティン・ジャングットであったが、その一方で、開発計画をドリアン・タワー村で実施するようにオラン・アスリ局にはたらきかけ、富の分配という開発に関わる権威も掌握していったのである。ドリアン・タワー村の開発史には、こうした政治的背景が存在していたのである。

三　村人の範疇化――「上の人々」と「下の人々」

今日のドリアン・タワー村では、村人はいくつかの範疇に分類されている。「上の人々」／「下の人々」、「アダット・グループ（*puak adat*）」／「宗教グループ（*puak ugama*）」／「酔漢グループ（*puak mabuk*）」、「エネックブア・プサカ（*enekbuah pusaka*）」／「エネックブア・バカー（*enekbuah bakar*）」／「エネックブア・ムンダタン（*enekbuah mendatang*）」などがそれである。これらは、ドリアン・タワー村が、一枚岩の共同体ではないことを表現している。実際に、こうした範疇に分類されたグループの間で様々な対立が表面化している。

本稿では、これらの範疇のなかで、「上の人々」／「下の人々」という村人の範疇を考察の対象とする。ここでは、その意味内容について説明しよう。

レワット派（現バティン・ジャングット派）の人々は、一九七〇年の家屋建設プロジェクトに参加し、旧ドリアン・タワー村から現在の丘の上の居住地に移住した。この家屋建設プロジェクトの結果、彼らは丘の上に住むことになったので、「上の人々（*Orang Atas*）」（世帯番号一から三九まで）と呼ばれるようになる。

それに対して、アリ派の人々は、家屋建設プロジェクトには参加せず、シアランにとどまり、その後、ほとんどの人々がジェラワイに移住してきた。また、一九七〇年代後半に、スランゴール州ブキット・ランジャン（*Bukit Lanjan*）から移住してきたアキ・マイン（*Aki Main*）派の人々（世帯番号五六から六三まで）は、移住当初は「上の人々」の居住地に住んでいたが、その後、「上の人々」と折り合いが悪くなり、ジェラワ

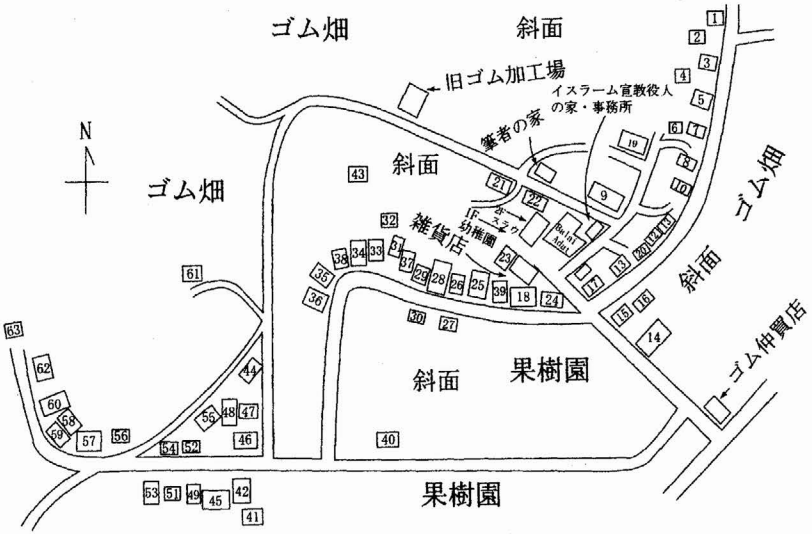


図4　ドリアン・タワー村居住地

イの端に移住している。アリ派とアキ・マイン派の人々は、丘の下に住んでいるので、「下の人々(*Orang Bawah*)」(世帯番号四〇から六三まで)と呼ばれるようになった。

この村人の範疇は、居住地の地理的位置(図四参照)に基づく範疇であるばかりでなく、基本的には、レワット派とアリ派の親族間の対立構造を反映した範疇でもある。称号継承という文脈で言えば、レワット派は初代バティン・バニンの正統なる継承者たちをその中核としている。一方、アリ派は、まさにアリの子孫を中心に形成された親族集団である。母系アダットの原理に従えば、アリの子孫(アリ派)は称号の継承者ではない。にもかかわらず、バティン、マンクゥ、ジェナン、ジェクラなどの称号がアリ派に付与されたのは、絶大な権威を持っていたアリ(アリ自身はバティン・バニンの正統な継承者)の影響力によるところが大きい。

また、この範疇によって表現されているのは、経済的な階層構造でもある。「上の人々」の大半は、オラン・アスリ局による家屋建設プロジェクトに参加したことからも判断できるように、一九七〇年代以降の政府主導の開発計画にバティン・ジャングットの指導の下で、積極的に参加していった。彼らは従来の狩猟採集活動を主流とした「生存の経済」からゴム採取を中心とした「農業」へとその生業を転換させていった人々でもある。一方、「下の人々」は当初は開発計画に反発したものの、その後は「上の人々」中心の開発計画から半ば「排除」され、好むと好まざるとにかかわらず、「生存の経済」を生業の中心

としてきた人々である。両者の経済関係については後述するが、結論を先取りして言えば、開発計画が進行するにつれて、両者の経済的格差は広がっている。

新居住者であるアキ・マイン派を含む「下の人々」の耕作地は、開拓を積極的に押し進めた「上の人々」のそれと比較すると、相対的にその規模は小さい（表一および表二参照）。したがって、現在では、換金を目的とする狩猟採集活動や、華人やマレー人が雇い主の日雇い労働が、彼らの生業の中心となっている。森林伐採や森林地域の開発によって森の環境も変化し、獲物や森林産物が減少し、従来の「生存の経済」だけでは生活が困難な事態となっているのだ。

表1

世帯番号	男女別世帯人数			聞き取り調査		開発プロジェクトの援助を受けたゴム畑				
	男性(名)	女性(名)	総計(名)	ドリアン畑(エーカー)	ゴム畑(エーカー)	JHEOA(エーカー)	RISDA(1)(エーカー)	RISDA(2)(エーカー)	RISDA(3)(エーカー)	総計(エーカー)
1	3	3	6	3	10	3	2.2	5	3	13.2
2	0	2	2	0.5	2	0	0	6	7.7	13.7
3	1	3	4	2.5	8.5	0	0	3	2.7	5.7
4	1	2	3	0	2.5	0	0	0	0	0
5	3	3	6	13	11	3	0	8	4.8	15.8
6	1	2	3	2	3	0	0	0	0	0
7	2	3	5	1	2	0	0	0	2	2
8	4	2	6	10	6.5	0	2.2	2.2	2.7	7.1
9	3	6	9	13	25	0	2	3	0	5
10	5	6	11	2	10	0	3	4	10.1	17.1
11	5	3	8	0.5	9	0	2	3	0	5
12	2	4	6	10	10	0	0	3	0	3
13	6	3	9	10	19	0	6	5	4.8	15.8
14	11	11	22	39	14.5	0	8.2	3	0	11.2
15	0	2	2	4	5	0	3	3	0	6
16	2	5	7	3	3	3	0	9	8.9	20.9
17	2	1	3	0	4	0	0	0	0	0
18	2	5	7	10	18	3	5	0	0	8
19	2	4	6	13.5	25	4	4	8	9	25.0
20	2	4	6	4	5	0	0	0	0	0
21	2	4	6	0.5	9	0	5	0	0	5
22	5	1	6	0.5	9	0	4.2	2	2	8.2
23	2	2	4	0.25	3	0	0	0	0	0
24	4	3	7	1.75	30	0	3	8	11.8	22.8
25	3	4	7	4	5	3	0	0	0	3
26	2	1	3	6.25	8	0	7	4.4	2	13.4
27	1	0	1	1.5	0	0	0	0	0	0
28	6	6	12	5	12	0	4.2	5.2	6.5	15.9
29	2	1	3	3	2.5	0	5	0	0	5
30	1	4	5	0	2.5	0	0	2.2	2	4.2
31	3	1	4	0.5	7.5	0	2.2	0	4.6	6.8
32	1	1	2	0.25	5	0	0	2.2	2.2	4.4
33	4	4	8	0	3.5	0	0	0	1.8	1.8
34	3	5	8	2	10	0	3	1.2	5.5	9.7
35	7	4	11	8	18	4	3	0	2.5	9.5
36	6	1	7	1	12	3	0	0	6.7	9.7
37	3	2	5	2	7.5	3	6.2	2	0	11.2
38	4	3	7	0.5	5	0	2	0	0	2
39	0	2	2	3	5	0	0	2	2	4
40	2	1	3	0.5	5	0	0	3	2	5
41	3	3	6	2	6	3	0	3.2	0	6.2
42	4	3	7	2	9.5	3	0	0	3.5	6.5
43	1	0	1	0.25	4	0	0	0	0	0
44	3	4	7	0.5	3.5	0	0	0	0	0
45	5	6	11	4	9	0	4.3	0	2	6.3
46	4	5	9	1	6	3	0	3	7.2	13.2
47	4	3	7	2	5	0	3	3	6.5	12.5
48	1	2	3	4	2	0	0	0	0	0
49	5	4	9	2	4	0	0	2	3	5
50	2	2	4	2	5	0	3	3.2	2.7	8.9
51	4	4	8	0	0	0	0	0	0	0
52	3	1	4	0	0	0	0	0	2	2
53	2	5	7	5	3	0	0	3.2	3.2	6.4
54	5	1	6	0	2.5	0	0	0	0	0
55	3	2	5	6	9	3	0	0	0	3
56	5	1	6	0	1	0	0	0	0	0
57	3	3	6	1.5	3	3	0	0	0	3
58	3	4	7	0.5	3	3	0	0	0	3
59	2	2	4	1.5	3	0	0	0	0	0
60	6	6	12	0.5	3	0	0	0	0	0
61	5	1	6	0	8	3	2	2	1.1	8.1
62	5	1	6	0	2.5	0	0	3	0.7	3.7
63	1	4	5	1	3.5	0	0	0	0	0
総計	197	191	388	217.25	448	50	94.7	120	139	403.9

注）世帯調査とオラン・アスリ局（JHEOA）・ゴム小農開発庁（RISDA）におけるドリアン・タワー村関連の資料に基づく。

表2 「上の人々」と「下の人々」の比較（一世帯あたりの平均値）

	男女別世帯人数			聞き取り調査		開発プロジェクトの援助を受けたゴム畑				
	男性（名）	女性（名）	総計（名）	ドリアン畑（エーカー）	ゴム畑（エーカー）	JHEOA（エーカー）	RISDA(1)（エーカー）	RISDA(2)（エーカー）	RISDA(3)（エーカー）	総計（エーカー）
「上の人々」	2.97	3.15	6.13	4.6	8.9	0.7	2.1	2.4	2.7	8
「下の人々」	3.38	2.83	6.21	1.5	4.2	0.9	0.5	1.1	1.4	3.9
村全体	3.13	3.03	6.16	3.4	7.1	0.8	1.5	1.9	2.2	6.4

四　「上の人々」と「下の人々」の格差

1　ドリアン・タワー村における開発

一九七〇年に、オラン・アスリ局は二五戸の家屋建設プロジェクトをドリアン・タワー村で実施した。一九七〇年代中頃、旧ドリアン・タワー村地域に住んでいたレワット派の人々は、今日のドリアン・タワー村の居住地域に移住してきたのである。一九七九年には水道が、一九八四年には電気が通るようになった。一九八六年にはジャナン・ミサイが運営する雑貨店が政府の援助で開店する。一九八七年には「上の人々」の住む地域に舗装道路がつくられ、セパッ・タクロー（*sepak takraw*）のコートが建設された。一九八八年には、自力でアダット会館（*Balai Adat*）が建設されている。

一九八〇年代には、ゴムの開発計画が実施される。一九八一年には、ゴム加工施設がゴム小農開発庁（RISDA）によって建設されている。それまではムントゥリ・レワットやバティン・ジャングットの指導で行われていた自力によるゴム採取業に対して、政府による援助が実施されるようになったのである。一九八二年には、オラン・アスリ局によるゴム開発計画が実施され、約五〇エーカーの土地にゴムの苗木が植えられた。その後、一九九二年までに、ゴムの木の植え替えやゴム畑の開拓を行うゴム小農開発庁のプロジェクトが実施された。その他に、ヤギ飼育の援助や養魚池のプロジェクトも実施されている。[6]

このような開発計画は、バティン・ジャングットを中心とした「上の人々」をその対象として実施されていた。開発対象を村レベルで決定するのは、バティン・ジャングットをはじめとするアダット・リーダーたちであった。開発援助を受けたゴム畑を比較してみると（表二参照）、「上の人々」の占める割合が多いことに気づく。

しかしながら、UMNO（United Malays National Organization：統一マレー人国民組織）[7]のドリアン・タワー村支部長をバティン・ジャングットの息子ティカ（*Tikak*）が就任するようになると、それまでのバティン・ジャングットを中心とした「上の人々」への開発の集中に変化が見られるようになる。[8]

一九九〇年代になると、オラン・アスリ局中心の開発計画は終息し、UMNOやJKKK（Jawatankuasa Kemajuan dan Keselamatan Kampung：村落開発・保安委員会）[9]などの別の機関からの援助が増加した。それは、バティン・ジャングット

の開発計画のリーダーとしての役割が終息したことを意味していた。最貧民層への家屋援助プロジェクトは、一九九二年と一九九六年の総選挙の年に実施されている。また、一九九一年には、総理府がスラウ（*surau*：礼拝所）の建設（幼稚園の建物の二階）とイスラーム宣教役人の事務所兼家屋の建設を行っている。

一九九〇年代には、「下の人々」の一部にイスラーム改宗者が出現し、イスラーム局や半官半民のイスラーム団体であるプルキム（PERKIM：マレーシア・イスラーム福祉協会）経由の援助が実施されるようになる。具体的には援助金やニワトリ小屋建設プロジェクトであり、一九九八年現在のところ村内の経済に大きな影響をもたらすものではないが、将来的に行われるであろう開発計画は村内の政治経済に影響をもたらすにちがいない。

2　ドリアン・タワー村の経済

今日のドリアン・タワー村の生業は、ゴム採取、ドリアン、ランブータン、バナナ、野菜といった換金作物栽培を中心とした「農業」、ラタン（籐）、プタイ、香木（*gaharu*）、蜂蜜などの森林産物の採集活動、イノブタ、サル、リス、野鳥、陸亀、大トカゲ、ヤマアラシ、ヘビ、カエルなどの狩猟活動、川魚などの漁撈活動、華人やマレー人を雇い主（頭家 *tauke*）とし、「苦力（*kuli*）」として働く日雇い労働（道路工事、家屋建設、ゴム採取やサトウキビ栽培などの農業労働など）、そして、工場労働や出稼ぎなどが挙げられる。その他に、自給食としてのキャッサバや野菜の栽培も行っている。そして、養魚池での魚の養殖、鶏などの家禽の飼育も行っている。

かつての村人の祖先たちの生業は、狩猟採集活動と焼畑耕作が主流であった。そうした過去の生業との比較で、今日のドリアン・タワー村の生業の特色を述べるならば、換金活動の主流化と「生存の経済」の周縁化である。貨幣経済の流入によって、ドリアン・タワー村の生業・経済は大きく変化している。それを象徴するのが、一九七〇年代中頃に起こった水田耕作の廃止とゴム採取の拡張であった。

ヌグリ・スンビラン州において、水田耕作の衰退をもたらしたのはゴムの導入であると加藤［KATO 1991］は述べている。ドリアン・タワー村の場合にも、そうした傾向はあてはまる。[10] 水田耕作の廃止と平行して、ゴムの開発が進行していたため、米を自給に頼っていた人々はゴム採取で稼いだ現金で米を購入するように変化していったのである。

今日のドリアン・タワー村の人々にとっては、ゴム採取、「農業」、狩猟採集活動、日雇い労働などの生業活動の大半が、「現金を探す」（*cari wong, cari duit*：looking-for-money）［cf. GOMES 1986］ことを目的とする活動である。「現金を探す」ことは狩猟採集活動における「食物を探す」（*cari makan*）ことと同じだと人々は言う。つまり、そのくらいに貨幣経済は彼らの社会に浸透しているのである。表面的には「生存の経済」に見える狩猟採集活動も、その内実は貨幣経済

に組み込まれた換金活動へとその質が変化している。[11]

このように、今日のドリアン・タワー村の生業と経済は、貨幣を中心としたものになっている。そのなかで最も安定した現金収入をもたらす生業がゴム採取とドリアンの収穫である。そこで次に、ゴム採取による収入とドリアン収穫による収入を、「上の人々」と「下の人々」で比較し、ドリアン・タワー村の経済関係を明らかにしよう。さらに、補足的情報として、ドリアン・タワー村の世帯状況を、「上の人々」と「下の人々」との間で比較したものを示すことにする。

3　ゴムとドリアン

ゴム畑はいくら多く所有していてもゴム採取の作業を行わなければ換金できない。ゴムによる収入は、実労働を反映しているのである。それに対して、ドリアン畑は多く所有していればいるだけ収入に反映する。しかも、ドリアンの場合には、畑の規模よりもどのくらい多くのドリアンの木を所有しているかということが収入に関係してくる。ドリアンはそれが熟して落ちてくるのを集めて、ドリアン卸売業者（*tauke durian*）に売却することによって換金される。ゴム採取作業のような労働は基本的には必要としないのである。

ドリアン畑は、ゴム畑と比較すると継承財としての意味が強い。祖先、祖父母、親などの上位の世代の人々が植えた（あるいは森で発見した）ドリアンの木が、子孫の財産となっているのである。ゴムの木の場合には、ゴムの苗木を植えてから七年ほど成長を待たなければゴム採取はできない。そのゴムの木は約四〇年ほどゴム採取に耐えられると言われている。その後は、老木として伐採され売却される。ドリアンの木は継承できるが、ゴムの木は継承できないのである。

ゴム採取とドリアン収穫について、「上の人々」と「下の人々」の間の収入を比較してみると、明らかな格差が見られる[12]（表三および表四参照）。以下、詳しく見ていこう。

ゴムについての上位世帯を見てみると、ムントゥリ・レワットの子孫（一、五、八、九）、バティン・ジャングットとジェナン・ミサイのキョウダイ（一三、一四、一九、二四、二五）、ムントゥリ・レワットの弟の子孫（二八）、ムントゥリ・グムゥ（三五）など世帯が目立つ。いずれも、称号保有者およびその近親者の世帯である。いずれの世帯も、多くのゴム畑を所有している。バティン・ジャングットと確執のある息子ティカの世帯（一八）の数値が低いのは、華人にゴム畑のほとんどを賃貸しているからである（賃貸料は一年契約で約三、〇〇〇リンギット・マレーシア）。ティカの世帯のゴム採取業は、実際には彼の妻や子供たちが行っている。

こうした「上の人々」の世帯に対して、「下の人々」の上位世帯を見ると、いずれもバティン・ジャングットの指導に従っている世帯（四〇、四一、四五、五五、六一）である。彼らは「下の人々」ではあるが、「上の人々」と対立することはなく、逆に積極的に交流しようとしている。それが、ゴム採取業に反映されていると言えよう。イスラーム改宗者の世帯（四六、五

表3

RM：Ringgit Malaysia

世帯番号	ゴム		ドリアン	
	重量(kg)	金額(RM)	重量(kg)	金額(RM)
1	10908	10873.15	2377	3624
2	2171	2081.5	106	159
3	5724	5319.6	1372.5	2148.2
4	2440	2091.5	0	0
5	9042	8568.65	908	1376.4
6	3104	2923.15	674	1032.8
7	3723	3563.81	344.5	537.8
8	9360	8719.56	2938	4446.2
9	9794	8993.2	7718.5	10801.5
10	2238	2048	1076.5	1509.55
11	6361	5889.6	1986	2888.2
12	7149	6859.66	3443	5077.4
13	10760	10258.25	3575	5541.8
14	39214	36906.22	2911	4617.5
15	51	46.9	213	434.4
16	7379	7067.84	97	151.2
17	6084	5744	0	0
18	545	550.96	805.6	1477.95
19	14897	14035.05	3488	5199.6
20	2553	2441.5	472	752.5
21	5379	4987.73	329	577.5
22	4699	4410.68	93	173.5
23	4087	3844.7	46	75
24	15515	14738.1	2708.7	4796.6
25	10208	9743.82	517.6	1017.1
26	3274	3025.71	836.5	1180.9
27	0	0	105	139.65
28	15876	14976.81	5320	7677.3
29	667	597.05	1462.5	2228.7
30	148	131.44	1330.5	1891.65
31	0	0	1282	1970.5
32	1590	1427.9	0	0
33	415	404.4	272	479.2
34	4597	4368.74	243	394.8
35	19307	18119.1	1653	2554.3
36	0	0	1390	1931.4
37	5173	4949.75	102	125.4
38	5338	5111.59	2063	2952
39	2560	2553.7	694	787
40	2505	2423.45	1171	1370
41	4775	4495.85	70	145
42	0	0	63	96
43	401	396.2	1338.5	1833.9
44	2038	1970	608	822.4
45	6648	6262.05	567	852.1
46	5859	5598.1	672.2	1284.46
47	0	0	1329	2295.7
48	0	0	1698	7564.6
49	1248	1124.6	649.1	1242.75
50	3735	3575.65	2145	2914.85
51	0	0	0	0
52	0	0	0	0
53	784	718.9	532	724.4
54	523	473.7	20	25.8
55	3693	3461.4	701	1025.95
56	1380	1313.49	0	0
57	0	0	671.5	1000.1
58	1055	1033.1	0	0
59	324	313.2	0	0
60	133	122.7	23.5	39
61	4523	4224.4	0	0
62	622	501.5	437	550.2
63	0	0	423.3	678.9
総計	292576	276381.61	68072.5	107194.61

注）ゴムのデータは、1997年2月から1998年1月までの村内ゴム仲買店における集計調査に基づく。ドリアンのデータは、1997年10月から1997年12月のドリアン収穫期における集計調査に基づく。

○）を含む「下の人々」の上位世帯のほとんどは、バティン・ドゥラマンやジェナン・キチョイの子供たちの世帯である（アリ派）。ゴム畑が少ない新居住者アキ・マイン派の世帯は、「上の人々」に従っている世帯（六一）を除いて、低い数値である。彼らのほとんどは、日雇い労働に従事している。

ドリアンについて見てみると、「上の人々」では、ムントゥリ・レワットの子供（一、八、九）、マンクゥ・ウジャンの子供（一二）、バティン・ジャングットのキョウダイ（一三、一四、一九、二四）、ムントゥリ・レワットの弟の子孫（二八）、ムントゥリ・グムゥ（三五）とジェクラ・アサン（三六）の世帯が上位を占めている。一方、「下の人々」を見てみると、ジェクラ・ポヤンの娘（四〇）、バティン・ドゥラマンの息子（四三）、ジェナン・キチョイの息子（四七）と娘（四八、五〇）の収入が目立つ。四三は狂人（*orang gila*）であるので、兄である四五の世帯収入となっている。また、四八の夫は華人で、単価の高いドリアンを栽培しているので、収入が多い。アキ・マイン派（五七、六〇、六二、六三）は、アキ・マイン（五七）所有のドリアンの木からの収入のみである。

ドリアンによる収入は、実労働ではなく、その世帯が置かれた親族関係が大いに関係している。かつてのアダット・リーダーたちの子孫の世帯がドリアン収入の上位を占めていることがそれを証明している。逆に、若夫婦の世帯はドリアンの木を所有していないこともある。そうした場合でも、運搬作業を手伝うなどして、たとえドリアンの木を所有していなくても、所有

者と親族関係があればドリアン収穫の恩恵を受けることができるのである。

ゴムによる収入が定期収入だとするならば、ドリアンによる収入はボーナスである。また、ゴムによる収入には実労働が反映しているのに対して、ドリアンによる収入には親族関係が反映している。一世帯あたりの平均値を「上の人々」と「下の人々」で比較してみると（表四参照）、ゴムによる収入では「上の人々」が「下の人々」の約四倍であるのに対して、ドリアンによる収入では「上の人々」が「下の人々」の約二倍である。この倍率の差は、実労働、畑の所有率、収入の性質などがその原因として考えられる。

表4　「上の人々」と「下の人々」の比較（一世帯あたりの平均値）

	ゴム		ドリアン	
	重量(kg)	金額(RM)	重量(kg)	金額(RM)
「上の人々」	6470	6112.14	1409.06	2121.24
「下の人々」	1676.92	1583.68	546.63	1019.42
村全体	4644.06	4387.01	1080.52	1701.5

RM：Ringgit Malaysia

「上の人々」と「下の人々」の間の格差以外に、ここで指摘しておくことは、アダット・リーダーたち（及びその近親者）の世帯の収入の多さである。つまり、「上の人々」の間で、緩やかではあるが、階層化が進んでいることが、個々の世帯の分析からから窺えるのである。バティン一族を中心に富が集中する現象は、オラン・アスリの村々で一般的に見られる現象であるが、ドリアン・タワー村ではそうした富の集中がより顕著に見られることを、ここでは強調しておきたい。

最後に補足すべきことは、ゴムとドリアンによる収入が少ないからといって、総収入がそれだけ少ないというわけではないということである。ゴムやドリアンによる収入が少ない世帯では、森林産物の採集活動や日雇い労働などで家計収入を補っている。むしろ、そうした生業による収入が主となり、ゴムとドリアンによる収入は副収入にすぎないという世帯も存在している。しかし、少なくとも、安定した現金収入を望めるゴム採取が主生業の位置を占め、比較的規模の大きいドリアンの収穫が見られるドリアン・タワー村の経済状況のなかでは、ゴムとドリアンによる収入を指標としてここで取り上げることは妥当であると考えている。なぜならば、ゴムとドリアンに見られる収入格差が、次に示す「上の人々」と「下の人々」の世帯状況の相違に反映されているからである。

4　世帯状況

電気と水道については、オラン・アスリ全体の統計データが存在しており、電話・テレビ・ビデオ・ラジオ・冷蔵庫・自動車・バイク・自転車については、都市部と農村部のデータを含むオラン・アスリ全体とマレー半島全体の普及率の一九九一年現在の統計データが存在する（表五参照）。それぞれの品目は

急激に普及するものであり、一九九一年のデータと一九九七年のドリアン・タワー村のデータを単純に比較することは危険である。しかし、それを承知の上で、ドリアン・タワー村の経済状況の一端を示すために、あえて比較してみる。

ドリアン・タワー村全体の普及率とオラン・アスリ全体の普及率を比較するとドリアン・タワー村の普及率が大きく上回っていることが分かる。「上の人々」の普及率はさらにオラン・アスリ全体を上回っている。都市部のオラン・アスリの普及率との比較においても、農村部のドリアン・タワー村全体の普及率は、いくつかの品目で上回っており、「上の人々」の普及率の場合には、都市部のオラン・アスリの普及率とほとんど変わらないか上回っている品目も存在する。「上の人々」の場合の普及率は、都市部のオラン・アスリの普及率と同様に、マレー半島全体の普及率に接近している。

「下の人々」の普及率は、オラン・アスリ全体の普及率に接近していると言ってよい。したがって、「下の人々」の生活状態は、オラン・アスリ全体の中では、「平均的」とも言える。しかし、同じ村内に住む「上の人々」と比較すると、彼らの生活状態が困窮しているように見えるのはなぜなのか。それは、単純に相対的な問題なのか。しかし、(マレー人、華人、インド人などの他の民族を含む)マレー半島全体の普及率と比較した場合、オラン・アスリ全体の普及率そのものが低いということを考慮すれば、相対的な困窮という見解は単純すぎるようである。逆に、「上の人々」が富裕に見えるのも、ドリアン・タワー村内においてのみであり、マレー半島全体を考慮すると、彼らの生活状態が必ずしも豊かなものであるとは言えない。

ここでの目的は、「上の人々」と「下の人々」との間の世帯状況の相違を比較することである。「上の人々」と「下の人々」の普及率を比較すると、ビデオの項目を除けば、「上の人々」が「下の人々」より高い普及率を示している。「下の人々」のビデオの普及率が高い理由は、アキ・マイン派の世帯が華人が雇い主の日雇い労働を行い、華人の雇い主からビデオを贈り物として受け取っているからである。筆者の世帯調査では、それらの世帯のなかで、電気が通っていないにもかかわらず、ビデオを所有している世帯が複数存在していた。また、最貧民開発計画(PPRT:*Program Pembangunan Rakyat Termiskin*)の家屋援助プロジェクトの分配は、「下の人々」が高い比率で受給している。こうした「上の人々」と「下の人々」の世帯状況の相違は、ゴムとドリアンによる収入の格差と連動していると言えるであろう。

五　考察

バハロンは、ドリアン・タワー村における称号継承過程を、「村人が主張する母系のアダットが規範に過ぎず、実践としては母系の原理では継承されていない」として、母系のアダットの形骸化を強調するために例証している[BAHARON 1973: 123-125]。ただ、それと同時に、村人が絶えず称号継承過程において母系のアダットを意識していることも指摘している

表5　世帯状況

	「上の人々」	「下の人々」	ドリアン・タワー村全体	都市部のオラン・アスリ	農村部のオラン・アスリ	オラン・アスリ全体	マレー半島全体
世帯人数の平均	6.13人	6.21人	6.16人	-	-	-	-
寝室数の平均	2.74	1.96	2.43	-	-	-	-
PPRTの比率	5.1%	45.8%	20.6%	-	-	-	-
ガス台所の普及率	69.2%	37.5%	57.1%	-	-	-	-
電気の普及率	87.2%	50.0%	73.0%	-	-	36.2%	-
水道普及率	100.0%	25.0%	71.4%	-	-	46.4%	-
電話の普及率	66.7%	12.5%	46.0%	29.6%	1.8%	6.0%	34.0%
テレビの普及率	76.9%	45.8%	65.1%	75.8%	30.7%	37.6%	82.1%
ビデオの普及率	7.9%	20.8%	15.9%	28.7%	3.4%	7.3%	32.6%
ラジオの普及率	79.5%	58.3%	71.4%	72.2%	49.3%	52.7%	78.3%
冷蔵庫の普及率	33.3%	4.2%	22.2%	59.5%	8.3%	16.1%	63.5%
洗濯機の普及率	12.8%	0.0%	7.9%	-	-	-	-
自動車の普及率	17.9%	8.3%	14.3%	29.2%	4.1%	7.9%	34.2%
バイクの普及率	89.7%	75.0%	84.1%	39.8%	35.0%	35.8%	52.9%

注）ドリアン・タワー村のデータは、世帯調査に基づく。オラン・アスリのデータは、Profile of the Orang Asli in Peninsular Malaysia, Population Census Monograph Series No.3 [Department of Statistics 1997]に基づく。

[BAHARON 1973：127]。このバハロンの指摘（称号継承過程における母系アダットへの志向性）は、バハロンの調査以後のドリアン・タワー村における称号継承過程において、より強調されるようになっていく。それは、バティン・ジャングット派（「上の人々」の中核）への称号保有者の集中でもあった。筆者の調査時においては、称号継承は母系の原理で行うべきという規範が見事なまでに実践されるようになっていたのである。

一時は、アリの影響力のなかで、アリ派への称号の集中が見られたが、バティン・ジャングットがバティンの称号を継承して以降、レワット派（現バティン・ジャングット派）への称号の集中が見られるようになる。それは、称号継承という文脈では、レワット派、つまり、初代バティン・バニンの正統なる称号継承者たちの復権の物語である。

そうしたバティン・ジャングット派への称号の集中と、バティン・ジャングットを仲介者とする開発計画の推進が、ドリアン・タワー村では平行して行われていた。アリ派の人々は、家屋建設プロジェクトやゴム開発に対して、当初不参加を表明したために、結果的に、開発計画から排除されていく。開発計画における富の分配はバティン・ジャングット派に集中し、そうした経済的な開発やオラン・アスリ局を後楯にした権威を背景として、バティン・ジャングット派が政治的権威を掌握していったのである。

開発計画推進の結果、家屋建設プロジェクトに参加し、バティン・ジャングットに従った「上の人々」と、家屋プロジェク

トに参加せず、バティン・ジャングットやオラン・アスリ局に反発し、ゴム開発に興味を示さなかった「下の人々」の間に経済的な格差が生じた。従来のカテゴリーにおける、レワット派の人々とアリ派の人々の間に、経済的な格差が生じたことになる。かつて、森林産物の採集や狩猟活動が、主たる生業であった時代には、アリ派が主導権を握っていた。その証拠として、アリ派への称号の集中が挙げられる。しかし、ドリアン・タワー村の生業が、政府による開発政策によって、狩猟採集活動からゴム採取を中心とする農業へ転換した結果、ゴム採取を積極的に導入していたレワット派が、経済的に優位にたったのである。

今日のドリアン・タワー村の経済を、ゴム採取やドリアン収穫、世帯状況などの指標で見てみると、「上の人々」と「下の人々」の経済的格差は決定的である。また、本稿で紹介する紙数的余裕はないが、教育歴（学歴）の高い子弟は「上の人々」に集中しており、UMNOなどの役職なども「上の人々」に集中している。すなわち、「上の人々」と「下の人々」の経済的格差は、今後も再生産されていくことが予想されるのである。

「上の人々」と「下の人々」という村人の範疇化は、家屋建設プロジェクトを契機としていたが、レワット派とアリ派の親族の確執が背景として存在している。バティン・ジャングットをリーダーとするレワット派の人々は、開発計画を取り込んでいく過程で、母系アダットのイデオロギーを用いて、自らの称号保有の正統性を主張し、称号にかかわる伝統的な政治的権威や開発にかかわる新興の政治的権威を掌握していった。その一方、アリ派の人々は、開発計画から排除され、称号も奪われ、政治的権威も失っていったのである。これが、「上の人々」と「下の人々」という範疇が生成された過程である。

六　おわりに——今後の展望

ドリアン・タワー村の歴史を紐解くと、一世紀くらい前に、タンピン方面という不明確なところから移住してきた祖先たちの物語からその歴史は始まっている。その後、人々は分裂や集散を契機として移動を繰り返した。そして、日本占領期や非常事態宣言期という激動の時代を経験し、マレーシア独立後には「オラン・アスリ」という民族名称を与えられるようになった。そして、オラン・アスリ局職員として政府当局と関係していたバティン・ジャングットがバティンに就任してからは、バティン・ジャングットを中心とした親族集団（旧レワット派の子孫）に開発計画が集中するようになった。バティン・ジャングットは、オラン・アスリ局という後楯を得て、母系アダットのイデオロギーを利用し、それまでアリ派に集中していた称号をレワット派（バティン・ジャングット派）に集中させていったのである。

バティン・ジャングット時代以前のドリアン・タワー村は、政府との結びつきを特別に持たないありふれたオラン・アスリの村であった。マレー人バティン・シウントゥンの存在を考慮すれば、そもそも「オラン・アスリ」かどうかということも怪

しいくらいである。しかし、バティン・ジャングットがバティンに就任するころには、オラン・アスリと国家との関係は大きく変化し、そうした時代背景のなかで、ドリアン・タワー村は、バティン・ジャングットという仲介役を得て、開発のモデル村という特別な村へと変貌していったのである。

バティン・ジャングット時代以降のドリアン・タワー村の歴史過程は、バティン・ジャングット経由の政府主導の開発計画が、村社会の階層化を引き起こした物語として認識できる。また、それは同時に、政府主導の開発計画の積極的導入を通じて、バティン・ジャングットが村社会の中でより強固な政治的権威を掌握していく物語でもある。しかも、そうしたコンテクストのなかで、母系アダットのイデオロギーが称号継承の政治学において利用され、強化されていったのである。

こうしてドリアン・タワー村では、開発計画を契機として、村人の間に階層化が引き起こされ、それが「上の人々」と「下の人々」という村人の範疇で表現されるようになったのである。本稿では詳しく触れなかったが、「アダット・グループ」、「宗教グループ」、「酔漢グループ」という村人の範疇も存在する。それについての分析と考察は別稿に譲るが、その範疇化は、「上の人々」と「下の人々」という階層構造が、イスラーム化政策を契機として、再編される過程を表現している。

開発計画により経済力をつけた「上の人々」（旧レワット派の子孫）がイスラームに改宗しマレー社会への統合あるいは同化を果たすならば、政府当局が意図する開発計画は「成功」のはずである。しかし、実際にはそうではない。「上の人々」の多くはイスラームへの改宗を拒否している。逆に、政府当局の当初の意図に反して、開発計画から排除され貧民化した「下の人々」（旧アリ派の子孫）を中心にイスラーム改宗者が出現しているのである。そうしたイスラーム改宗者を中心とした「宗教グループ」やアルコールに耽溺する「酔漢グループ」（新居住者アキ・マイン派）に対して、バティン・ジャングットを中心とする「上の人々」は非イスラーム性を強調するアダットを用いることで自らのアイデンティティを模索しはじめている（「アダット・グループ」の生成）[cf. 信田　一九九九]。これがドリアン・タワー村の現況である。

村人の範疇化は、開発やイスラーム化によってドリアン・タワー村の人々の社会的、政治的、経済的状況が急激に変化していることを端的に示している。開発による人々の意識やアイデンティティの変化に注目した本稿では、「上の人々」と「下の人々」という村人の範疇化を手がかりに、ドリアン・タワー村の階層化（具体的には階層意識の生成）を考察した。イスラーム化政策を契機とした村人の範疇化については、アダットをめぐる政治学という脈絡のなかで考察する必要があるが、それについては稿を改めて論じたい。

付記

本稿は、財団法人民族学振興会平成七年度渋沢研究助成金、富士ゼロックス小林節太郎記念基金、そして平成八年度文部省

アジア諸国等派遣留学生制度の研究助成を受け、マレーシアでの滞在期間（一九九五年一二月から一九九六年二月、一九九六年六月から一九九八年九月）に行ったフィールドワークに基づいている。調査の実施に際しては、村の人々をはじめ、本当に色々な方々のお世話になった。改めて、感謝の意を表したいと思います。

また、本稿は、一九九九年一二月一七日に開かれた東京都立大学社会人類学研究会、および一九九九年一二月一九日に東京学芸大学で開かれた「仙人の会」で行った口頭発表に基づいている。研究会の参加者の方々からは、貴重なコメントをいただいた。また、本稿の草稿段階では、伊藤眞先生や社会人類学年報編集委員会の方々から有益なコメントをいただいた。以上、ここに記して深謝の意を表します。

註

(1) バティン・シウントゥンはパハンから逃走していたマレー人戦士であり、近隣のマレー人集落には彼の親族が住んでいた。また、彼はムスリムでもあり、礼拝を欠かさなかったと伝えられている。

(2) ダト・アブドラ（パハン出身）はバティン・シウントゥンと親族関係があったと言われている。

(3) プラドンにおいて、オラン・アスリの人々が水田耕作やキャッサバ・バナナ栽培を行うための耕作地を、当時のジェルプのD.O.（District Officer）が州の森林局に対して申請している記録が残っている［JABATAN HUTAN NEGRI SEMBILAN 24/54 1954］。非常事態宣言期のオラン・アスリ行政やオラン・アスリの人々の状況については、LEARY［1995］を参照。

(4) 妻方居住を基本的な居住規則としているためである。

(5) トラーについてはスマッ・ブリを調査した口蔵［一九九六：一六五―一六六］を参照。

(6) 一九八六年にはヤギ飼育の援助も行われたが、これは失敗に終わった（現在では一匹のヤギも村内にはいない）。一九八八年には、五三区画におよぶ養魚池のプロジェクトも実施されている。これもまた、「水の供給が悪い」、「エサを買う資金がない」、「採算がとれない」などの理由で放置されている池がほとんどである。

(7) 一九八八年には、村人の大半がUMNOに入党することになった。

(8) それまでの開発のルートは、バティン・ジャングットを経由したものに限定されていた。したがって、必然的に、開発対象や開発資金はバティン・ジャングットの親族や彼に従う「上の人々」に集中していたのである。それに対して、UMNOの支部長に就任したティカが新興の指導者となることで、もう一つ別の開発ルートがつくられるようになったのである。ティカの台頭によって、「上の人々」の間に微妙な亀裂が生じることになり、バティン・ジャングットと息子ティカの確執が表面化する。その後、ゴム開発において、ティ

カと親しい「下の人々」が開発対象となっていった。

(9) 一九七二年以降、マレーシアで導入された制度である[MOHD TAP 1990：58]。オラン・アスリの村落の場合、近隣のマレー村落に含まれる形で導入されていることが多い。すなわち、委員会の大半のメンバーはマレー人であり、オラン・アスリは委員会のメンバーの一人に任命されているにすぎない。したがって、援助や開発の決定権はマレー人が実質的に掌握し、オラン・アスリは部分的恩恵を受けるにすぎないのである。それでも、委員会メンバーであることは、オラン・アスリ村落の文脈の中では、権威を持つものである。ドリアン・タワー村の場合、JKKK のメンバーには、バティン・ジャングットの息子ティカが任命されている。

(10) ただし、ゴムの導入が水田耕作の衰退をもたらしたという認識はドリアン・タワー村の人々の間には存在しない。むしろ、森林伐採やダム建設などの開発による森の環境の変化が原因で、森の保水力が低下し、河川に土砂が流れこみ水位が上昇したり、安定した水の供給が得られなくなったことを具体的理由として、水田耕作を廃止したと人々はいう。

(11) イノブタやリスを捕らえては、華人の仲買人に売却し、それによって得た現金で鶏肉や野菜を購入している彼らの姿にそれが象徴されている。

(12) 一人あたりの平均値や中央値などによる比較も考えられるが、本稿では家屋建設プロジェクトに参加した世帯群（「上の人々」）と参加しなかった世帯群（「下の人々」）の比較を考慮して、一世帯あたりの平均値で比較する。

参照文献

BAHARON AZHAR RAFFIEI 1968 *Religion in Social Change among the Orang Asli*. Kuala Lumpur：Jabatan Hal Ehwal Orang Asli.

———1973 ——：*An Orang Asli Community in Transition*. Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Cambridge.

CAREY, I 1968 The Orang Asli and Social Change. *Federation Museums Journal* 13：57-64.

———1970 The Religious Problem among the Orang Asli. *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society* 43(1)：155-160.

EVANS, I. H. N. 1915 Notes on Various Aboriginal Tribes of Negri Sembilan. *Journal of Federated Malay States Museums* 6(2)：100-114.

GOMES, A. G. 1986 "*Looking for money*"：*Simple Commodity Production in the Economy of the Tapah Semai of Malaysia*. Unpublished Ph. D. Dissertation, Australian National University.

HOOD SALLEH 1989 Bases of Traditional Authority among the Orang Asli of Peninsular Malaysia. *Akademika* 35：75-86.

KATO, Tsuyoshi 1991 When Rubber Came: The Negeri Sembilan Experience. *Southeast Asian Studies* 29(2):109-157.

LEARY, J. D. 1995 *Violence and the Dream People: The Orang Asli in the Malayan Emergency* 1948-1960. OH: Center for International Studies, Ohio University.

MOHD. RUSLAN ABDULLAH 1974 *Review and Notes on Policy and Development*. Kuala Lumpur: Jabatan Hal Ehwal Orang Asli.

MOHD TAP SALLEH 1990 *An Examination of Development Planning among the Rural Orang Asli of West Malaysia*. Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Bath.

NOONE, H. D. 1936 Report on the Settlements and Welfare of the Ple-Temiar Senoi of the Perak-Kelantan Watershed. *Journal of the Federated Malay States Museums* 19(1):1-85.

足立　明　一九九五「開発現象と人類学」米山俊直(編)『現代人類学を学ぶ人のために』京都：世界思想社、一一九―一三八。

信田敏宏　一九九九「改宗と抵抗――マレーシアのオラン・アスリ社会におけるイスラーム化をめぐる一考察」『東南アジア研究』三七―一：一五七―一九六。

口蔵幸雄　一九九六『吹矢と精霊』東京：東京大学出版会。

坪内良博　一九八四「東南アジア島嶼部における『小国』の存在形態に関するノート」『東南アジア研究』二二―一：六―一四。

資料

DEPARTMENT OF STATISTICS (MALAYSIA) 1997 *Profile of the Orang Asli in Peninsular Malaysia. Population Census Monograph Series No. 3*.

GOVERNMENT OF MALAYSIA 1961 *Statement of Policy Regarding the Administration of the Aborigine Peoples of the Federation of Malaya*.

JABATAN HAL EHWAL ORANG ASLI (JHEOA) 1983 *Strategi Perkembangan Ugama Islam di Kalangan Masyarakat Orang Asli*.

（のぶた・としひろ　専修大学非常勤講師）